

英語とアメ車と研究と

江藤 学

住友金属工業(株)鹿島製鉄所

情報システムの充実した大学と気さくな教授

1990年3月から丁度一年間、社費海外研修の機会を与えられ、米国リーハイ大学のAvitzur教授のもとで勉強させていただいた。

リーハイ大学はペンシルバニア州東部のベスレヘム市にある。そこはベスレヘムスチールの本拠地で、ビリー・ジョエルが隣のアレンタウン市の名をタイトルにして歌ったとおりの鉄鋼の町である。人口7万の小都市における製鉄所の存在は大きく、人員整理計画の発表でもあれば地方紙の一面は完全に占拠されてしまう。しかし概して工業都市という趣でもなく、緑の丘陵の谷間に見える高炉に違和感さえ覚えるような自然に囲まれた静かな町だ。

大学のキャンパスはリーハイ川を見下ろす丘の斜面に広がっている。頂上にはベスレヘムスチールの研究所があるが、一部の建物は大学に売却されているので丘全体をキャンパスと呼んでも差し支えない。125年の歴史を持つ石造りの古い建物と木立が落ち着いた雰囲気を作り出している。周囲とは対照的な近代建築で一際目を引く図書館には95万冊の蔵書があり、その全てがコンピュータで管理されている。各学部には大型計算機と接続された端末が充分な台数設置されていて、この端末を利用すればどこからでも図書の概要、所在、貸出状態を知ることができる。大学内の情報システムにはこの他にも事務連絡、売り買いの情報交換、個人間の通信等々の機能があり、その充実度には驚かされる。私もアパート探しや家具の売買に利用して便利さを実感した。このような情報システムの普及において日本はアメリカの足元にも及ばないのではないかと思います。

Avitzur教授は大変気さくで親切な方で、公私共に本当に御世話になった。かなりの親日派であられ、これまでに何度も来日されている。また、御子息の一人は日本人と結婚されており、偶然にもその方が私と同郷であったことも手伝って、御一家で親しくしていただいた。

教授はこの年も7月に京都で開かれた塑性加工の国際会議のために来日された。そこでの特別講演として教授御自身の御経歴を紹介されることになり、ユーモアたっぷりの漫画のスライドを何枚か用意された。会場の日本の方々にも楽しんでもらいたいとお考えで、私がそれに日本語訳を付けることになった。例えば学生時代の博士号の審査会のシーンでは、審査員の方々をWatch Dog, Guardian Angelと表現されていたので、それぞれ鬼、仏と意識させていた

だいた。また、御自身を老いたライオンに、周囲で色々なことを言う若手の研究者達を子犬に例えた絵も用意され、私にウィンクしながら犬という言葉の卑小なイメージを強調したいと言われたが、犬は日本語でも同様に使われると説明し、「獅子は老いても獅子、子犬は所詮子犬」とこれは直訳させていただいた。

外国語は難しい

さて、私のように不勉強な者が海外で生活する場合、やはり言葉が最大の問題となる。英語など現地の生活を始めればなんとかなると思っていたが、実際は悪戦苦闘の連続であった。

その年のAISEの春の講演会はアラバマ州バーミングハムで行われたが、この道中でも英語に不慣れなために冷汗をかくはめとなった。アレンタウンからフィラデルフィアまで飛び、バーミングハム行きに乗り換えたまでは順調だった。ところが降り立った空港のバゲッジクレームで自分の荷物がいつまでたっても出て来ない。悲壮な決意で係員に問い合わせると、すぐに飛行機に戻れと急がされた。私の乗った便は実はナッシュビルに寄港し、バーミングハムに向け再び離陸するところだったのだ。機内放送があったに違いないが聞き取れなかったのだろう。さらに、ゲートへ走りながらふと腕時計を見ると、掲示板の出発予定時刻を一時間近く過ぎている。愕然として一度は立ち止まったが、先程の係員は確かにハリーアップと言っていた、と気を取り直して走り続けた。結果は間一髪のセーフ。アメリカを4分



写真 研究室の仲間と(左端: Avitzur教授 右から2人目: 筆者)

割するタイムゾーンの間にはそれぞれ一時間の時差があることを思い出し、機内で胸を撫で下ろしながら時計の針を遅らせた。

しかし滞在中一番真剣に英語を使ったのは車が故障したときだったかも知れない。中古のアメ車は故障が多いということは渡米前から知っていたが、アメリカまで来て日本車に乗っても面白くないと、83年物の5000ccのオールズモビルを買った。購入時に走行距離124,800kmだった車を160,000kmまで乗り回した訳だから故障も無理からぬところではあるが、案の定、何回かのトラブルに見舞われた。

ペンシルバニアには年一回の車検の制度がある。そのときに指摘されたのはブレーキの磨耗だけだったので、シュウを取替え、数日後安心してニューヨークまで出かけた。ところが途中でトランスミッションの調子が悪くなってしまったのである。幸い修理工場まで自走でき、その晩は友人の家に泊めてもらえたので難無きを得たが、この一件以来私は自分の車を信用しなくなった。

それでも懲りずに夏休みにはその車で大陸横断旅行を決行したのである。中西部の広大な平野を西の地平線目指して走っているうちは快調だった。「これぞまさしくアメリカだ」と悦に入っていたのだが、ロッキー山脈を目前にしたデンバーで先ず冷却ポンプの水漏れが見つかった。修理工場は完全なよそ者でしかも怪しげな英語を話す飛び込みの客にあまり優しくはない。好意を持ってくれない相手に事情を説明し工期を出来るだけ短縮するよう交渉するのは必死の思いであった。復路でのトラブルはイエローストーンの3000m級の山中でのエンストである。空気が薄いことも災いしてか全くエンジンを噴かせなくなり、休み休みののろのろ運転を続けるはめになった。歩いても変わらないので友人と運転を交代しては退屈凌ぎに道端を歩いていると、何人ものドライバーがどうしたのかと声を掛けてくれる。車社会の発達したこの国では道路を歩くこと自体珍しいのと、車のトラブルがあったときに助け合う習慣が出来ているからだろう。その日は深夜になって何とか宿のある町まで辿り着いた。翌日からは修理工場巡りである。エンジンが冷えていると問題の症状が出ないので、今度は状況の説明に汗をかくことになった。それらしき処置をしてもらい走り出すとまただめで、次の町で再びガレージ入りというパターンを4日も続けた。これだけやると車の専門用語もだいたい覚え、修理工場でも雄弁になれるものである。このときは結局点火系統の電気故障だったが、帰国直前には再びトランスミッションがおかしくなり、5000ドルで買った車を600ドル足らずで売り渡すことになった。語学の授

業料としては高くついた。

国際色豊かに

英語を身につけるにはネイティブと話すのが一番とよく言われるが、残念ながらAvitzur教授の研究室は留学生ばかりで、中国人、韓国人、ポーランド人、イスラエル人の中に私に加わるようになった。教授御自身もイスラエルから来られた方で、結局アメリカ人は一人もいなかった。研究室の壁には世界地図が貼られ、毎日のように国際問題が議論されていたし、部屋に中国人、韓国人と私しか居ないときは黒板一面に漢字が書かれていることもあり、大学の中でも風変わりな研究室だったかも知れない。英語力向上の観点からは多少難があったが、国際色豊かで楽しかった。

国際色といえば、コミュニティカレッジの英会話のクラスは研究室にも増してバラエティに富んだ人種の坩堝であり、ロシア、ハンガリー、ポルトガル、トルコ、ヨルダン、ベトナム、メキシコ、コロンビア、エクアドル等から来た人々が狭い教室にひしめいていた。職業、年令も多種多様で、語学の研修よりも異文化の交流という意味で大変面白かった。お互いに独特な癖のあるたどたどしい英語で談笑していると、世界中とつながりを持てたような気になり、これだけでもアメリカに来てよかったと思えた。それにしてもアメリカは移民の受入れに寛大であり、そのための教育制度もよく整えられていて感心する。この国が様々な人種問題を抱えるのはこの寛大さ故でもあり、むしろ敬意を表したい。

研究も真剣に

アメリカ滞在の本来の目的である研究の方も決して疎かにしていた訳ではない。研究のテーマは、Avitzur教授が得意とされる上界法を用い、平らな塑性材料と円筒状の工具との間の摩擦力を考察することだった。数値計算の結果をグラフにしては教授の部屋へ行きアドバイスをいただいた。ときには大学の前のピザハウスで紙の皿に図や式を書きながら討論したりもした。前提としている条件が工学的にどれ程評価されるかはさておき、グラフから読み取れる様々な事象の物理的な意味を考えるのは楽しく、よい勉強にもなったと思う。

帰国して一年以上立ってからこのときにまとめた論文がWearに掲載されるという連絡を受け、一年間のアメリカ滞在をただの生活体験でなく留学と呼ぶ資格を得たような気持ちになった。しかし例えそれが何と呼ばれようとも、私にとってかけがえのない貴重な体験であったことに変わりはない。